

デーヴォ ガイド



2022.5.9-15

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族のでいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?



4:1 こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。

2 この場合、管理者には、忠実であることが要求されます。

3 しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。

4 私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるものではありません。私をさばく方は主です。

5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。

6 さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロにあてはめて、あなたがたのために言って来ました。それはあなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。

7 いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものではないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

8 あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかつ

たのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。

分裂・分派についてパウロは、その信仰的な解決を図ろうと、話題を続けます。分派というのは神につながっているなら起きることではなく、人間につくことですから、その人間のリーダーシップの基本についてパウロは語ります。

コリントの人々に、心ならずも担がれてしまっているパウロやベテロなど使徒たちは、分派のためのリーダーではなく、神の奥義の管理者に過ぎないということです。それも忠実な管理者ですから、自分の主張のために誰かを味方につけて目的を達成しようなどとは考えてもいけないことです。

ですから「リーダーとして誰が誰よりもすばらしい、または劣っている」などと、さばくのは先走ったことなのです。人間が勝手に神のようにわかっているかのように勘違いして、人（ここでは指導者）に優劣をつけることはできません。

ですから私たちは、主が来られるときの称賛を期待して、（人の評価や優劣よりも）自分の使命を忠実に果たしていくものなのです。

続いてパウロは高慢な思いに囚われているコリントの人々に対して、皮肉によって気づかせようとして語っています。「他方に反対して高慢に」とありますから、高慢こそが分裂・分派の原動力です。高慢な人は自分と違う考えを受け入れないからです。

「豊かになっています。」というのは、そのように思い込んでいる、またはそうであるかのように振舞っているということです。人の意見を受け入れないで、自分だけで「さばきをして」いるからです。他人をさばく人は王のようですが、実際はそのようなコリントの人々が王になれるはずはありません。パウロは彼らに気づきを与えたくて、そのような書き方をしています。

以上の問題は誰にでも多かれ少なかれあるものです。自分の主張のために誰か賛同者として利用すること、そのために指導者などに優劣をつけること、そして自分は信仰的に豊かで分かっている、頑なになることを、自分自身への警戒として

考えて見ましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたの中の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



4:9 私は、こう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。こうして私たちは、御使いにも人々にも、この世の見せ物になったのです。

10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱い、あなたがたは強いのです。あなたがたは榮譽を持っているが、私たちは卑しめられています。

11 今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません。

12 また、私たちは苦勞して自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福し、迫害されるときにも耐え忍び、

13 ののしられるときには、慰めのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです。

14 私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとするためです。

15 たといあなたがたに、キリストにある養育係が一人であろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。

16 ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。

17 そのために、私はあなたがたのところへテモテを送りました。テモテは主において私の愛する、忠実な子です。彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キ

リスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。

18 私があなたがたのところへ行くことはあるまいと、思い上がっている人たちがいます。

19 しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところへ行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく、力を見せてもらいましょう。

20 神の国はことばにはなく、力にあるのです。

21 あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛と優しい心で行きましょうか。

当時のローマ帝国では、戦いに勝った将軍はその勝利を誇るために、戦利品を見せながら市街をパレードすることが許されていました。そしてその行列の「しんがり」には敗戦国の捕虜たちが引き立てられていたのです。彼らは闘技場などで野獣の餌食になる運命でした。

パウロは、自分たち使徒とコリントの人々を対比させるためにこの譬え（たとえ）を用いました。コリントの人々は自分の主張や都合を実現させようとし、違う考えを受け入れれない王のようになり、自分の目的を達成しようとしているわけで、それはまるで凱旋将軍のようだというのです。

一方パウロたちは捕虜のようであり、何ら自分たちにとって有利なものはないのです。パウロはコリントの人々に、本当の信仰とは何かを知らせたかったのでしょう。またクリスチャンの生き方として本当の誇りとは、また価値とは何かを知らせたかったのでしょう。分裂・分派は、ただそれを回避すればよいという問題ではなく、パウロにとっては靈的教育の絶好のチャンスだったのです。

主の栄光と摂理のために、自分の立場や主張をあえて通さずに、ただ忠実に仕えるということは、すばらしい生き方なのです。まさにパウロに「ならう者」となりましょう。

「そのような生き方をみんなにしてみたい」と願う人もいることでしょう。そのためにはテモテのような模範が必要です。それを願っている自分自身がまず模範となることです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



5:1 あなたがたの間に不品行があるということが言われています。しかもそれは、異邦人の中にもないほどの不品行で、父の妻を妻にしている者がいるとのことですよ。

2 それなのに、あなたがたは誇り高ぶっています。そればかりか、そのような行いをしてる者をあなたがたの中から取り除こうとして悲しむこともなかったのです。

3 私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行いをした者を主イエスの御名によってすでにさばきました。

4 あなたがたが集まったときに、私も、霊においてともにおり、私たちの主イエスの権能をもって、

5 このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が減ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。

6 あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。

7 新しい粉のかたまりのままにいたるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。

8 ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、純粋で真実なパンで、祭りをするではありませんか。

9 私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きまし

た。

10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。

11 私が書いたことのほんとの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけな、いっしょに食事をしていけな、ということですよ。

12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。

13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。

「父の妻を妻に」とは、あらゆる点で問題の不品行です。それでも「誇り高ぶっている」ということは、おそらく別の面では優れているのでしょう。ある面で優れていても、他の面で問題があれば、反省すべきです。

パウロが「さばきました」というのは、祈りの中で神様のさばきに委ねたのだと思われます。

「サタンに引き渡した」とは、サタンの誘惑や苦しみがあってもやむをえないということだと思われれます。しかしそれによって「彼の霊が主の日に救われる」ということは、最終的には、罪を犯している者が苦しみの中から悔い改めて、主のみこころに立ち返ることを願っているということです。

このように主のみこころに反する人に対しては、委ねるしかない場合がありますが、それは回復を願ってのことです。

パウロはクリスチャンであっても不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者とは交際するなど言います。これは罪が教会に蔓延しないためです。教会が罪からきよめられるためには二つの道があります。ひとつは罪ある者を追い出すこと、もうひとつは罪を悔い改めて変わるように励ますことです。危機的な状況ではコリントのような処置が必要です。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたその部分の主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？





6:1 あなたがたの中には、仲間の者と争いを起こしたとき、それを聖徒たちに訴えないで、あえて、正しくない人たちに訴え出るような人がいるのでしょうか。

2 あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力が無いのですか。

3 私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。

4 それなのに、この世のことで争いが起こると、教会のうちでは無視される人たを裁判官に選ぶのですか。

5 私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁することのできるような賢い者が、ひとりもないのですか。

6 それで、兄弟は兄弟を告訴し、しかもそれを不信者の前でするのですか。

7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。

8 ところが、それどころか、あなたがたは、不正を行う、だまし取る、しかもそのようなことを兄弟に対してしているのです。

9 あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を

礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、

10 盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしてる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。

11 あなたがたの中にある人たちは以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

教会の中で意見の食い違いがあったり、それが発展して批判し合うことは当時もあったようです。人間の集まりですからあり得ることでしょう。その場合、信仰よっての解決すなわち神様に聞いて、聖霊と聖書によって解決するのがクリスチャンです。

コリントの人々は神に聞くことを忘れて、自分が勝たいたいばかりに、神を信じない人までも仲間にして争ったようです。

「そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。なぜ、むしろ不正をも甘んじて受けないのですか。なぜ、むしろだまされていないのですか。」とは、傾聴すべきことばです。相手に勝とう、自分が正しいことを証明しようとするのですが、その争いがすでに「敗北」です。たとえ自分の意見どおりに教会が動いても、霊的に疲労した教会を見て喜ぶのはサタンです。「思い通りの結果が出た」「私の意見が用いられた」と喜んでいても、敗者なのです。

主の栄光だけを求めて、自分ばかりの勝利を求めよう。そうすれば主から勝利をいただけます。そして「聖なる者」「義」なる者としての生き方になるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



6:12 すべてのことが私には許されたことで
す。しかし、すべてが益になるわけではあり
ません。私にはすべてのことが許されていま
す。しかし、私はどんなことにも支配されは
しません。

13 食物は腹のためにあり、腹は食物のため
にあります。ところが神は、そのどちらをも
滅ぼされます。からだは不品行のためにある
のではなく、主のためであり、主はからだの
ためです。

14 神は主をよみがえらせましたが、その御
力によって私たちをもよみがえらせてくださ
います。

15 あなたがたのからだはキリストのからだ
の一部であることを、知らないのですか。キ
リストのからだを取って遊女のからだとする
のですか。そんなことは絶対に許されません。

16 遊女と交われば、一つのからだになるこ
とを知らないのですか。「ふたりは一体とな
る」と言われているからです。

17 しかし、主と交われば、一つ霊となるの
です。

18 不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべ
て、からだの外のものです。しかし、不品行
を行う者は、自分のからだに対して罪を犯す
のです。

19 あなたがたのからだは、あなたがたのう
ちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、
あなたがたは、もはや自分自身のものではな
いことを、知らないのですか。

20 あなたがたは、代価を払って買い取られ
たのです。ですから自分のからだをもって、
神の栄光を現しなさい。

遊女という言葉がありますから、これは性的な
問題を扱っています。もちろん、私たちは律法か
らは自由になりました。そしてだからこそ、自分
自身で何が良いことかを選び取らなければいけ
ないのです。食物もそうですが、性的な罪をさける
ことはさらに重要です。それは霊的な影響を及ぼ
すからでもあります。(16)

神様のきよさ、相手を思いやるきよい愛、主に
従う忠実さなど、「神の栄光」を現すことのため
に力を尽くしましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の
約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願
いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなた
の部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



7:1 さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのは良いことです。

2 しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。

3 夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。

4 妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のもです。同様に夫も自分のからだについての権利を持っておらず、それは妻のもです。

5 互いの権利を奪い取ってははいけません。ただし、祈りに専念するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです。

6 以上、私の言うところは、容認であって、命令ではありません。

7 私の願うところは、すべての人が私のようであることです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。

7:8 次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていただけるなら、それがよいのです。

7:9 しかし、もし自制することができなければ、結婚しなさい。情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです。

7:10 次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。

7:11 ・ ・ ・もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。 ・ ・ ・また夫は妻を離別してはいけません。

7:12 次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。

7:13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知しているばあいは、離婚してはいけません。

7:14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。

7:15 しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのようなばあいには、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。

7:16 なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。

エペソ人への手紙に結婚の崇高な意味を述べているように、パウロは決して結婚を情欲の制御のためだけとは考えてはいません。ただパウロは現実を直視していました。結婚は神様のきよい秩序の中であって祝福されたものですが、「サタンの誘惑にかからない」ようにすることが大切なので

す。私たちも、サタンの誘惑には弱者であることを認めつつ、しかし神の祝福の道に歩めるように、聖霊に頼っていきましよう。

結婚についてのパウロの教えには特徴があります。ひとつには主の永遠の真理と、それを適用したパウロ自身の考えです。

永遠の主のみこころは、クリスチャンは離婚はしないということです。結婚は主の愛を表すものだからです。しかしそれは相手にもよることですから、どうすることも出来ない場合があります。パウロは「もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。」と、現実的なアドバイスもしています。

ここでは様々な事例についてパウロのアドバイスがありますが、どれも共通しているのはクリスチャンである方が、自分から離婚したりまたは相手を引き止めたりすることを、とどめているということです。クリスチャンはあくまでも結婚において主の栄光を表すものですが、それは双方の信仰の一致によって成り立つものです。不信者の配偶者について「必ず救われる」と言うことはできないのです。救いは主の主権によるものです。

この箇所を読む場合、それぞれの状況が違いますから、自分の場合をよく理解しましょう。そして主の永遠の原則に従いつつ、自分のすべきことについて、祈って導かれましょう。

- ①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）
- ②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）
- ③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

- ④この世にあって何を実践しますか？

7:17 ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています。

7:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。

7:19 割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。

7:20 おのおの自分が召されたときの状態にとどまっています。

7:21 奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。

7:22 奴隷も、主にあって召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。

7:23 あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。

7:24 兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態です。神の御前にいなさい。

パウロはコリントの教会のクリスチャンたちに具体的な指示を書いています。具体的であるということは現実の状況に即して考えられているということです。他の教会や他の時代などでは通用しない場合もあります。パウロは「私は、すべての教会で、このように指導しています。」という表現で、あくまでも自分自身の指導方であることを示唆しています。

これらは絶対永遠の命令ではありませんが、当然、

多くの教会に当てはまることでもあります。ただ大切なことは、律法として受け取って「これは禁止」「あれは容認」という理解ではなく、そこにある霊的な真理です。

パウロは割礼の「跡をなくしてはいけません」というからといって、割礼派ではありませんし、「割礼を受けてはいけません」と言っているからといって、無割礼派でもありません。割礼の有無が信仰の価値基準にはならないということを言いたいのです。

また「奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。」と言ったからといって、奴隷制度支持者ではありません。奴隷が自由人かに左右されずに神の幸いや恵は与えられるということを書いたのです。

「これこれをしてはいけない」とか「この方がより信仰的だ」というような、律法的・外面的の信仰基準はさばきや分派を起ししやすいものです。また社会問題・政治問題もそれを信仰と混同させるとさばきや分派を起ししやすいものです。主の恵やみざわはそれらを越えているのだという真理に立ち続けましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

